えにし

中村増子

武田ミキ先生の御逝去を知らされて今私は言いようのない自責の念にかられている。親孝行をしないままに親に死なれた不孝な娘、そのような悔いが寂しさを一層深くする。

学園を去ってから一、二度お訪ねしただけで二十年近くも訪れることもなく、気にかかりながら、特に近頃早くお会いしたいとしきりに思いながら、とうとうお会いすることもなく旅立たれてしまわれた。「先生ごめんなさい」

思へば、結婚、出産により一度中断された教育への熱い思いが再び武田ミキ先生によって叶えられた昭和三十六年の春を私は決して忘れることが出来ない。

初めて訪れた面接の時、眼鏡の奥の優しいまなざし。黒の羽織に袴。そして鉛筆を持たれた先生の手の荒れが胸を打った。週二回の講師の採用が決まって帰り途、私の心は霽ればれと明るかった。私の思いをそっくり受け入れ

て下さった先生が心から有難かった。

当時、私には五歳と三歳の二人の子供が居り、下の三歳の娘が保育園に入ることになったのを機会に、しぶる夫をやっと説得して講師にでもと武田ミキ先生にお願いしたのであった。

ところが家庭と職場の両立の壁は予想以上に大きかった。四月の始業式前の会議に初めて出勤したその夜、夫が子供の事を理由に勤めを断念するよう言い出したのである。出勤一日にして私は動転し必死に哀願したが、夫は頑として聞き入れない。私は始業式を待つばかりの学校の迷惑を考えると絶対にそのような我がままな事は言えない。若しどうしても許せないのならあなたが校長先生にお願いして下さい。と……

まさか夫が夜もすっかり更けた田舎の大毛寺の我が家から武田学園まで自転車で出かけるとは思ってもいなかったのである。あのような一徹な夫は後にも先にも一度だけであったことを思うと、夫も子供の事を思って必死の思いであったことと思う。

武田ミキ先生との話合いがどのようなものであったかは私にはいまだにわからない。しかしそんな夫を温情あふれる説得によって、何とか私の希望を叶えて武田学園で働かせていただけた四年間は、私の生涯忘れることの出来ない四年間であった。

案の定、子供の次々の病気、入院等々、とても満足できる勤務情況ではなかった。そんな私に会議中早くお帰りなさいとそっと紙切れを渡して下さったり、何時も優しく見守って下さり、ともすれば挫けそうな私を支えていただいた。

思えば先生にとって当時は学園の発展途上にあり、心身共に御苦労の多い時であった。まさに学園を挙げてミキ

先生の下に教職員一丸となって事に当たっている時であった。

このような時夫の転勤とはいいながら、たった四年で学園を去ることは申し訳ないことであった。先生をしのぶ原稿の依頼に対して、私はただただ不肖の一教員であり、何等先生の御厚情にお報い出来なかったお詫びを記すのみである。

私は先生のきびしさの底に流れる愛の心をひしひしと感じる。この人間愛が多くの人の心を打ち、次々と困難をのり越えて教育に生き教育に死する生涯を貫かれた原動力となったのであろう。

武田ミキ先生、天上でどうぞ安らかに、先生の御意志の脈打つ学園の発展を見守っていて下さい。